学生のページ

土木系学生会

■ 日本訪問記・皆さん本当にありがとう

スウェーデン・ゴッセンバーグのチャルマース工科大学の4年生と5年生の土木・建築の学生が，今年の3月から4月にかけて日本各地を見学旅行した。ここに，見学旅行の委員会として，有意義だった日本旅行の報告をさせていただく次第です。と同時に，日本の大学教授諸氏，土木系学生会などの日本学生，そして私達の旅行を歓待し，旅行準備などに多大なるご協力を下さいました日本の企業に対し，心から感謝の意を表します。

チャルマース工科大学　日本訪問団（1967 年）

※ ※ ※ ※ ※ ※

私達が日本を訪問するという計画は1年半ほど前に始められました。そのころ，私達は日本の工学書を読んで勉強し，旅行相談所にかけあい，そしてまた以前に日本に住んでいたことのある人達ともあって相談しました。その結果，今年の方針として日本に行ってみようということになったわけです。私達の強い願いと主張が教授会に提出され，学生団体，綜合大学，単科大学，東京のスウェーデン大使館，ストックホルムにある技術学会などと，何度も手紙を出して連絡をとった後，晴れて学部長が私達の旅行を承認して下さったのである。われわれ，強くたくましいチャルマースの 74 名（うち数名の女子学生を含む），この74名のリーダーとして同行して下さることになった。日本との通信によって，東京大学の本間先生を筆頭とする諸先生達，そしてまた，日本中の学生さん達との交渉も順調にすすんだ。日本の公企業，私企業および旅行業者との打合せにおいても，完全な旅行計画ができた。このように土木系学生会の東京の学生は東京近辺，大阪の学生は大阪近辺，九州は九州近辺というように，私達の旅行日程を取り決め，したくして下さった。このことは，私達の専門的な学科の見地から見て，日本の現状をほとんど全部見学できることを確約するものだった。また，不幸にしてある関係企業に謝罪報告を提出し，旅行団が頭を冷やすため，ある見学を断念しなくてはならないこともあった。私達はその頭を冷やすのを『個人の再建』と呼んだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※

今はもう東京のはずれ，羽田国際空港である。そこで早々と，すでに文通で知合っていた日本の土木系学生会の学生達と会った。日本学生との接触ということは，日増しに真に重要なものとなり，私達の旅行というものを相当有益なものにしてくれたのである。私達スウェーデン学生は，いわゆる“鍵”をはずし，日本人学生との接触をより一層深めた。そしてまた，彼等は通訳として，非常に価値ある存在となった。日本語と英語は似ても似つかずとても言語が違うので，英語を話す学生はどうしても少数に限られていた。私達にとって，二番目に重要となったのは，宮川俊彦，飯田　勝，小山次郎の3君である。とても英語が達者で，最初から最後まで寝食をともにし同伴して下さったことである。ジェット機時代とはいえ，20 時間というやけに長い時間の旅行で，東京のホテルでちょっとしたレセプションをやった後，ほとんどの者はぐったりしてベッドについてしまった。また，勇ましいのになると，翌朝からずっと広範囲な見学のスケジュールでいっぱいだというのを十分知っているのに，付近を探険しに小雨のふりそうな夜の中に姿を消して行った。プログラムは，まず東京地方をバスで回遊するように見学することで始まった。この日から 10 日間東京に滞在しながら，ビルに与える地震の影響を特別に取り上げて調査・研究している研究所，すでに完成し開通している地下鉄，工事中の地下鉄，建設中のダム，いろいろな印象深かった建造物，前川国男氏，葦原義信氏，そして中でもとりわけ丹下健三氏の設計した近代建築物などを見て回った。チャルマース工科大学で建築の

記念撮影

勉強をしている学生の将来の作品の中に，これらの日本の建築の感化の形跡を残すことができるとしたら，それはとても面白いだろう。私達の旅行は東京から観光地京都へと続いた。京都は 794 年から 1868 年までの間政治の中心地であって，隣の奈良とならんで何百年も昔に建てられた神社，そして仏教の寺だとか，門だとか壮大な塔などが沢山ある。寺や神社は大きな木から切りとった何平方メートルもある板の飾りで豊富に飾られていて，たとえば花だとか生き物だとかライオン（ここでは神社の狛犬（こまいぬ）のこと）やその他のいろいろな動物を象徴してあって，私は余りこわかったので『こいつらをどこか遠くへ連れてってくれ!!』と思ったほどだ。なぜ，こんなに器用に組継ぐ方式がとられ，複雑な工事をやってこれらの建物が作られたのかという理由の一つは，前世紀に随分猛烈な地震の被害をこうむったからなのである。大谷さちお氏（編集部注・音訳）の設計による京都の国際会議場のコンクリート工事も，どんなたぐいの天災にもびくともしないようなものになることを願っている。これは忘れることのできない建築物であり，また，その力強さたるは日本の近代建築の良い例でもある。1970 年に突入しつつある日本の情勢を考慮して計画されたらしい大阪の地下鉄計画など，大阪での見学を終えて神戸へと足を向けた。この神戸は東洋でも最も大きな港の一つで，ニューポート ホテルからその全景が見える。“チャルマーリスト”達が階上レストランのスカイラウンジの窓に，ごっそり集まって景色をながめたものです。ここは神戸牛の本場である。この神戸牛はレストランのチケット売場の宣伝によれば，ビールを飲ませ，毎日マッサージして育てた牛の良い肉だけとるらしい。その窓からは今論議を交わしている最中の四国と本土を結ぶ吊橋の架設地点も見えた。この橋が完成すればメイン スパンが 1 500 m の世界一長い橋となる。私達はこの橋に関するいろいろな物に接触する機会が沢山あった。たとえば東京大学で行なっている橋の模型の空気動力学的試験などがそうである。橋の話はこのくらいにして，遊びの話へ移る。翌日私達は関西汽船の船で，すでに陽も沈んだ内海の上を日本の最も南の島・九州にある別府へと向った。別府は私達の目的地の中で最も南にある所で，またアフリカの北端から，ちょっぴり南下したくらいの北緯 32 度まで南下したことになる。とにかく，日本もこのあたりまでくると南フランスの気候とそっくりである。九州で私達は活火山・阿蘇に登り，最後に，わが国（スウェーデン）の Tjörn 一橋のような橋が幾つも続いているあたりで海水浴を楽しみ，ここの訪問を切り上げた。おつぎは広島，ここは本州にあって，1945 年 8 月 6 日，原爆を投下されてから全世界に知れ渡った所である。旅行案内にはこう書いてある。『広島は世界で最初に原爆を落された町である……』。そこで私達は，この事実が宣伝の目的なのかと思った。この町を 1945 年以降に訪問するとなれば，それはもう数知れぬディテールが訪問客に対して世界平和を訴える。沢山の記念碑・記念像，そしてまた，今も平和公園に燃え続ける永遠の炎などのアピールで感動させられるのである。もし，ただ単に都市計画の技術者として冷たい眼でその街を見たら，あちこちでそれはもう沢山のビルがどんどん建っちゃうので，都市計画を考える暇なんか全然なかったと後悔するでしょうに。ですからして，日本ではどこの市でもいえると思うのですが，たとえば，いつも間違うような住所，たとえば○○町の△△番地へ行けといわれても，どこをどうやって行けば良いのか，全くそれはむずかしい注文です。広島から大阪へと足を延ばし，世界中でもかなり有名な国鉄の東海道新幹線の超特急『ひかり 2 号』に乗って東京へ戻ってきた。見学の最後の日は，大学付属の施設や，都庁の研究調査などを見学させていただいた。その日の夕方からずうっと夜遅くまで，日本人の学生さん達が私達のためにわざわざ素晴らしいパーティーを開いて下さった。私達一同，過ぎし日の楽しい思い出をもたらしてくれ，また，多大な協力を寄せてくれた日本人学生一人一人に限りない深謝の意を表した次第である。また，私達はホストに対しても非常に感謝している。この数週間，日本のことをいろいろ教えてくれようと努力を払って下さったし，自由時間までもいろいろ面倒を見て下さったのである。日本人学生とスウェーデン学生の間の殻というものにちょっとまどわされたのは別として，私達は，わが親愛なる日本の学生さん，皆さんが私達の旅行を成功させて下さったのです，と確信しています。

V 4 : S Study Tour Commitee 1967/Ebbe Björkqvist/Chairman

（翻訳・法政大学　小林聖二）

日本の土木技術 ——100 年の発展のあゆみ——

日本の今日における輝かしい土木技術発展の蔭には，明治初期から約 100 年にわたる多くの先輩方の努力を見逃してはなりません。本書は従来あまり見られなかった土木技術史の領域に目を向け，現在を力強く支えている数々の貴重な業績を新しい体系で迫ったきわめてユニークな書籍です。若い技術者とくに，これから土木工学の真髄をきわめようとする学生諸君，建設会社に就職された新入社員に，土木とは何か，そしてなすべき仕事は何だろうか，という問題意識を高める上に貴重な書籍ですので学校，会社等でまとめてご購入下さるようおすすめします。

体　裁：A 5判　488 ページ　　定　価：1 200 円　　送　料：150 円